

**作品説明**(山下和也)

## 罔両画(もつりよつが)

罔両画は中国南宋時代の禅僧の余技として生まれた絵画のひとつ。禅僧・智融(一一一四〜一九三)が始めたとされる。その絵は「墨を惜しむこと命を惜しむが如し。」と言われているが、現存しない。極度に薄い墨と僅かな筆致で消え入るように描かれ、その消え入るような見え方から罔両(魑魅魍魎、精霊と名付けられる。莊子の『齊物論篇』には景(影)と罔両(半影＝影の影)が議論する話があり、本来は罔両はこちらの意味に由来する。中国では南宋〜元時代の一時期にしか描かれませんが、罔両画やその系譜にある牧谿の作品は、室町時代の足利将軍のコレクションである東山御物に多く所蔵され、狩野派をはじめ、長谷川等伯、俵屋宗達など、日本の水墨画史上に多大な影響をあたえる。しかし、罔両画は室町時代以降六〇〇年に渡って取り組む作家がほほいないことが特筆される。また罔両画には「侘び・寂び」「幽玄」「余白」といった日本の美意識に通じる情趣や美しさを見い出すことが出来る。現代において、このミニマルな絵画様式はあらたな絵画の可能性を内包していると私は考えている。

## 「詞に現れぬ余情、姿に見えぬ景気」を描く

15世紀(室町時代)に大成した能楽には「幽玄」という美意識がある。もともとは仏教用語で、奥深く微妙で、簡単には知りがたいという意味である。日本では藤原俊成(一一一四〜一二〇四)が和歌論に使い始め、能楽や茶道の美学として発展し、日本人の美意識の中核となる。俊成の息子である藤原定家と同世代の鴨長明は、著書の『無名抄』(一一二一〜一二一六)で「幽玄を」詞に現れぬ余情、姿に見えぬ景気」と規定する。さらに俊成が詞すがたを超えた景気の中に重層性や奥行き的美を見出すのに対して、長明は隠すことによる無や不在が働きかける人間の想像力に着目している。

## 須磨

作品①②③

須磨の海はただの海ではない。歴史と物語の重層性に満ちた海である。古今和歌集の在原行平をはじめ、源氏と平氏の合戦、それから生まれた数々の和歌や能楽は数えきれない。私の「須磨」は、能楽「須磨源氏」、源氏物語「須磨」「絵合せ」からその着想を得ている。須磨は平安の頃より流刑の地であり、源氏物語「須磨」は在原行平の逸話をヒントに書かれているとされている。流刑の地で暇を持て余し、様々な遊びに興じる光源氏だが、その心は華やかな都を思い、郷愁している。須磨では「うつろな心」で日々を過ごしていたが、その後、明石の君との出会いや物語のターニングポイントなる重要な時間を過ごしている。後段の「絵合せ」では、自分の娘を天皇の妃にするため、その座を巡って敵対する相手と絵画「レクシヨン」で対決する。光源氏は勝利するのだが、その勝利の決め手になるのが須磨の流刑時代に描いた日記絵巻であった。当時の光源氏の生活が偲はれる絵巻に、鑑賞者は皆涙したという。光源氏は手すさびに須磨の景色をいくつも描いたのだろう。中でも水墨で描いた須磨の絵日記を絵巻にした作品は、『絵合せ』の段であらゆる者の心を捉えた。源氏はこの須磨の景色をどのように眺めて、どのような絵を描いたのか、画家としては実に興味深い内容である。一方で、能楽の「須磨源氏」では、旅の僧が須磨で気になる桜をみつけ、それが光源氏のお手植えの桜であることを、かつての光源氏のご事とあわせてその桜の化身が告げる。さらにその夜に須磨の海に浮かぶ月を眺めていたら、月宮より光源氏の尊霊があらわれ、舞を舞って夜明けとともに消えるという内容である。春の海に浮かぶ月を夢うつつに眺める旅僧の姿が目に見えなくもよつである。それらのイメージから、私は須磨の海を罔両画で描くことにした。

## 松風

作品④⑤⑥

松は日本の風景、文化、生活に深く結びついた植物である。日本では神の依代や影向するための御神木であり、強い靈性を宿す木である。世阿弥による能楽「松風」は、在原行平と海女の姉妹の恋物語を基につくられた名曲であり、その内容は歌舞伎や日本舞踊にも展開されている。また、松の葉が風によつて立てる音を松風とも言い、禅には松風を聴いて心を澄まし、悟りを得る「聴松」という修行がある。私の「松風」は世阿弥の能楽と禅の瞑想方法に由来し、夢うつつのおわりに浮かび上がる松林を描いている。

## 松風(弐)

作品⑦

《松風(弐)》は、長谷川等伯の《松林図屏風》と関係性が指摘されている《月夜松林図屏風》から着想した作品である。《月夜松林図屏風》は長谷川派の作品で、『松林図屏風』のバリエーションとして注目されている。画面全体に闇夜を意識した墨色が見られ、左隻画面の最左側に月が大きく描かれている。近年の長谷川等伯展では、画面裏側の全体に真っ黒に墨が塗布されていた事が修理記録から分かり、その墨色が表面に現れて闇夜の表現に影響していたこと、構図的には左隻と右隻が逆で、中央に月を置く配置ではないかという指摘がされている。禅宗では、月は悟りの象徴であり、松風(聴松)は悟りを得る瞑想法である。また、能楽では「古野」の花、「松風」の月と言われ、松風は秋の月夜を舞台にした名曲である。

## 玄象

作品⑧⑨

玄象は平安時代の琵琶の名手・村上天皇の愛用の琵琶の名称で、能楽の演目のひとつ。その内容は藤原師長が音楽を志して南宋に旅立つ途中、摂津国須磨の浦で村上天皇の霊に押し止められたという逸話が題材となっている。能楽「玄象」では琵琶の名手・藤原師長が須磨の浦で宿を借りた老夫婦の前で琵琶を弾くうち、村雨が降り出す。そこで老夫婦は屋根に苦を敷き、雨の音と琵琶の音の調子を合わせるはからいをする。その対処に感心した師長は、老夫婦に音楽の心得があるとわかり一曲を所望、老夫婦の奏でる琵琶琴

の素晴らしさに自らを恥じる。この老夫婦が村上天皇と梨車女御の霊であった…。能楽の曲中でも度々琵琶を演奏している場面があるが、舞台の上では演奏は抽象化されており、特殊な演出を除いて実際に弾くことはない。この作品では夜の雨音と琵琶の響きが重なり合う世界観を視覚化する。線は雨となり、幽霊である村上天皇の琵琶の音の韻律となつて空間にあらわれては消える。

## Aura

作品⑩

フィンランドの古都トゥルクはアウラ川の河口にあり、バルト海に面した港湾都市です。アウラ川は市民にとつて親密であると同時に歴史的な場所です。二〇一八年のレジデンスはこの川沿いにあるTitanik galleryで行ないました。滞在中に見たフィンランドの自然と色彩、光と影はとても印象深く、色や光をモチーフにした作品を作りたくになりました。光(色彩)と水と筆触の運動をシンプルに用いて、空と水の景色の中にAura(靈性)をあらわしました。

## 山山

作品⑪⑫

この書作品は指でかく指頭画(しとうが)と呼ばれる方法を用いている。指頭画は8世紀の中国には行われていたようで、日本では池大雅がその名手として知られる。私の作品は「山」という字を書いているので指頭書と云つてよい。一つの文字を画面いっぱい大きく書く様式は「一字書」と言い、戦後の前衛書家たちがつくりあげたものがある。巨大な画面に大きな筆、あるいは何本も束ねた筆を使って全身全霊で書き、なかでも井上有一はその代表的な書家である。井上有一の一字書は読むことが容易だが、他の書家による前衛的表現は大抵読むことが難しい。しかし、読み難い文字は前漢時代の草書体、さらに8世紀にはそれをさらに崩した「狂草」という書が既にあり、書は書き順や崩しのかたちを目で追うことによつて文字を判読してきた。今回は「山」の字を小さな画面に書いている。筆ではなく自分の指(身体そのもの)を使って書く。紙は古典の料紙技法としてある雲母引きを行なっている。そこに凍墨という井上有一が初期の一字書で使用していた方法を採用した。雲母の白い輝きと凍墨による「山」の字は「Cold Mountain」、つまり寒山をイメージしている。「山山」は複数書いた山の字を集めた作品。個々に書いて独立したものが反復していることで、山の文字自体に様々なパスベクトイブ(空間、視座が生じる。なかには複数回なぞり書きして書き消されているものもある。そこでは書の持つ身体性と時間性が顕前化される。漢字は象形文字のため、源をたどれば、それは絵になる。小さな山の塊は雲母の鈍い光の反射によつて消えては現われ、距離や見る角度の違いで見え方が実際的に変化する。山は動いている。補足すると、禅の教義をあらわす言葉に不立文字という言葉がある。文字や教義の伝達のほかに、体験によつて伝えるものこそ真髄であるという意味。また、山とは言わずもがな私の苗字の一字であり、これは指で書いたサインでもある。

## The Pine Prince and the Silver Birch

作品⑬

「The Pine Prince and the Silver Birch」(1964)は、James Carol(1935,UK)による児童文字で日本では一九六七年に翻訳書が出版されました。松の木の王子と白樺の少女が愛の逃避行を行ない、共に老いて添い遂げるまでの愛と死の物語です。擬人化された神や自然、動植物の物語は時代を超えて世界中にあります。先人の作り出した神話や物語からは自然と人間の親密な関係を知ることができます。白樺と松はまるでフィンランドと日本をあらわすかのような両国を代表する植物です。二本の木は、ただ立っているようにも見えるし、なにか彼らだけの世界に私たちが入り込んでしまったようにもみえます。

## Vaina (Vainamoinen)

作品⑭

フィンランドの民族叙事詩Kalevala(カレワラ)を題材にした作品。Kalevalaは19世紀に民間説話からまとめられたフィンランドのアイデンティティをあらわす重要なフィンランド語文学。その成立にはフィンランドの歴史背景が深く関わつてゐる。Kalevalaの主人公Vainamoinenは不滅の賢者、水の主であり、元の伝承では世界の創造を行なったとされている。VainamoinenのVainaの語源は「深く、静かに流れる川」である。静かな水面(みなも)のさざなみはVainamoinenによる創世記の世界のはじまりをあらわしている。

## 松老雲閑(The Old Pine, Quiet of Clouds)

作品⑮

北極圏にあるラップランドはKelo(ケロ)という特殊な老松の産地です。Keloは寿命を終えても何十年、何百年と立ち枯れた状態で銀色に風化した松のことです。極寒の地に天に向かって孤高に立ち続ける姿は美しく壮絶です。死してなお堂々と天に向かって立つ超越した存在は、神々しさを感じます。日本では老松には神が宿ります。ラップランドの老松も神が宿っているかのようです。また日本には「松老雲閑」松は老いて、雲は閑か。という臨済(日本の禅僧)の有名な言葉があります。「老松や雲のように悠々自適な心境」という意味で禅の境地をあらわしています。老松がただ一本立っている、それだけでなにかとつともない世界が見えてくるよつでした。

## 寒山拾得

作品⑯⑰

禅画の画題「寒山拾得」を罔両画で試みた作品。本作では減筆、破墨、渴筆の技法を中心に余白の質を意識した罔両画の作品を試みている。その手掛かりとなったのは舞踏家の故・大野一雄へのリスベクトである。舞台芸術および身体芸術から生まれる捉えどころのない空間の質を余白の表現の質へと置き換える。罔両画は禅画から派生しているの祖師像などの人物画が画題となるものが多い。本作は作者が罔両画シリーズを試みた初期の重要な作品のひとつである。日本では初期水墨画の時代から江戸時代の會我蕭白、伊藤若冲、長沢芦雪などの奇想の画家から近代では横山大観、岸田劉生ら画家だけでなく、小説家の森鴎外、坪内逍遙らによつて作品化されてきた著名なモチーフである。

\*現代作家では元永定正《寒山拾得》やブライス・マーデン《Cold maintain(寒山)》シリーズがみられる。